東京都江戸東京博物館紀要　第５号　2015年３月
Bulletin of the Edo-Tokyo Museum、No. 5、P. 47-58、March、2015

今戸焼　土人形の寄贈とその関係資料に関する覚書

小　林　　克*

目　次

はじめに
１　今戸焼 土人形関連資料寄贈等の経緯
２　寄贈資料等
３　おわりに

キーワード　今戸焼　土人形　聞き取り　尾張屋春吉　金沢花　江戸在地系土器
蚊取線香燃焼容器

はじめに

今戸焼とは江戸時代に浅草の北、隅田川西岸の地、今戸で始められた土器を主体とする製陶業の事を言う[1)]。江戸東京博物館では、今戸焼に関連する資料について収集し、調査・研究を進めてきた[2)]。しかしそれは組織的に継続して調査・研究のテーマとして取り上げて来たという形ではなく、寄贈の申し出に対する対応としてであったり、映像資料作成に伴うものであったりして、その為、全体の姿が見えにくくなっている。ただし、開館当時の映像資料作成と、それに関連した寄贈資料等の収集については、「館蔵資料報告１　今戸焼」[3)]（以後、「今戸焼」という）としてまとめており、それは今戸焼職人の方々が次々と廃業する中で、緊急性と必要性を自覚して実施したものであった[4)]。また規模は小さいが、江戸東京博物館５階の第２企画展示室で、今戸焼についての展示を２回実施しており[5)]、こうした展示や「江戸東京博物館ニュース」での露出がさらなる資料収集に結びついている[6)]。

特に本稿では２回に分けて寄贈された今戸焼の土人形（以後、今戸人形という）について、その全体像を明らかにするため、寄贈資料や関連情報について述べ、報告書「今戸焼」を補足し、最後に今後の展望について述べる。

１．今戸焼 土人形関連資料寄贈等の経緯

今戸人形については、平成６年（1994）９月、人形研究者の故浦野慶吉さんから筆者の知人を通じ

*東京都江戸東京博物館学芸員

情報が寄せられた。戦前、台東区今戸の地で今戸人形を製造していた「尾張屋春吉」（以後、春吉という[7]）は名字を金沢といったが、彼の孫にあたる金沢武佑さんから、戦前に春吉が作った今戸人形等を寄贈したいという話であった。

江戸東京博物館では様々な資料の購入や寄贈の話が寄せられると、通報カードを起こし、担当のセクションでその対応を検討し、お断りするものは断り、受け入れる可能性がある件については調査を進める。本寄贈の申し出については、検討の上、調査を進めることとなり、平成６年10月21日に台東区今戸の金沢家に、筆者は調査で伺った。その家屋は昭和19年の空襲で以前の建物が焼けた後、戦後に建てられたものだとのこと。平成６年当時、武佑さんはご家族とともに千葉県千葉市花見川区に居住していて、今戸の家にはだれも住んでおらず、お一人での対応であった。武佑さんからは戦前に春吉が作った今戸人形、その当時の製造工程等を写した写真などを見せていただいた。武佑さんの寄贈の意思を確認し、その内容を博物館の担当セクションで検討した。その結果、寄贈を受け入れる方向となり、平成６年11月８日に台東区今戸の金沢家に運搬作業員とともに行き、武佑さんの立会いの元、資料を借り受けした[8]。本資料については、その後整理し、博物館の収蔵委員会等に付議し、正式に江戸東京博物館に寄贈された。この時、武佑さんから寄贈された資料は今戸人形88点、今戸人形製造等に関する写真52枚、人形に塗る胡粉１箱で、その他として記念メダル１点、刺子頭巾１着であった。その後、今戸人形に関係する資料については、実測図と観察表を作成して、前述の報告書「今戸焼」に掲載した。なお、当該報告書で、金沢武佑さんのお名前について「武祐」と誤植があった。この場を借りてお詫びし、訂正する[9]。

報告書「今戸焼」刊行後も、今戸焼に関する資料は、寄贈や購入で少しずつ増えていった。今戸人形については、平成21年７月に金沢武佑さんの妻・洋子さんから連絡が有り[10]、「武佑氏もご高齢となり、今のうちに、家に残っている今戸人形やそれに関連する資料等を見てもらいたい」とのことであった。この情報に基づき、平成21年11月13日、江戸東京博物館の担当学芸員と筆者で、千葉市花見川区の金沢武佑さん、洋子さんのご自宅に資料調査に伺った。この調査の際にお二人から、春吉の娘の花さん（武佑さんの母）から戦前の今戸人形作りについて洋子さんが聞き取りしたカセットテープがあると聞き、「このカセットテープを文章に起こして資料化出来ないか」との相談を受けた[11]。その後、諸々の事情により時間がかかったが、洋子さんにもご協力いただいて[12]平成25年度にテープ起こし作業が完了した。

次に、以上のような経緯で平成24年度に追加して寄贈された尾張屋（金沢）春吉の作った今戸人形と、春吉の娘・花さんへ、洋子さんが聞き取り録音したカセットテープの概要を紹介する。

２．寄贈資料等

①　今戸人形

前述のように平成21年11月に調査した資料は、正式に寄贈資料として江戸東京博物館に収蔵されたが、金沢武佑さんからの寄贈資料は、【表１】のように27点である。内訳は今戸人形が21点（半製品３点含む）の他に今戸人形を題材とした色紙３枚、同じく軸仕立ての日本画３点である。

今回寄贈していただいた今戸人形の何点かには裏面に名称が記載されていた。全ての土人形が型作りで中空であり、全て土器として焼成し、焼き上がった後で上に胡粉を塗り、更にその上に文様等を描いている。資料の名称については、この裏面に記載がある物はそれに従い、無いものについては通例に従って名称を付けている[14]。人形裏面に記載された名称は、恐らく花さんがつけたと思われるので、制作に関わっていた方の呼称という性格である。武佑さんによれば全て金沢（尾張屋）春吉の作である。年代は確定できないが、春吉の作ということで、大正から昭和19年間の制作と考えられる。また半製品も何点か有り、空襲で製造をやめる前頃の製造と推定できよう。

今回寄贈された今戸人形の中で、第１回の寄贈資料と同じモチーフのものは写真を省略している。以下資料の説明を行う。１は「春駒」。２は「秋田犬」である。型で作られ、土器が焼き上がった後に胡粉を全体に塗り、更に模様等を彩色している。底部、足の裏部分に名称が書かれている。３の「犬」はいわゆる張子人形の「犬張子」に類似した形態と彩色を有する。江戸遺跡からも江戸後期の時期に類似した資料が出土している[15]。４の「柳森狸」は目鼻が描かれておらず、制作終了前の半製品である。５は「丸〆猫」であるが、横向きで寝そべった姿の招き猫である。裏面の記載は「〆よこ猫」である。11の「おかめ」は今戸人形には珍しく正面だけでなく裏面、底面にも彩色が施されている。特に底面は、女性器と手足がユーモラスに型取り成形されており、その上に彩色されている。15、16は「異人さん」であるが、武佑夫妻の話によれば、輸出用として制作された箱庭人形だという。20、21の「房総雛」２点は半製品で、胡粉を全体に塗っただけの状態で、その上からの絵付けは全くされていない。

【表１】金沢武佑寄贈資料（平成 21 年度分）

番号	資料番号	資料名	作者名	作成年代	寸法（ｃｍ）
1	10000014	土人形　春駒	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	3.2×3.9×7.0
2	10000015	土人形　秋田犬	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	4.1×7.7×6.2
3	10000016	土人形　犬	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	8.0×4.0×7.4
4	10000017	土人形　柳森狸（大）半製品	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	3.5×3.4×4.8
5	10000018	土人形　丸〆猫	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	1.9×4.3×2.9
6	10000019	土人形　山王猿	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	3.1×4.0×6.9
7	10000020	土人形　うま	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	7.0×3.1×7.1
8	10000021	土人形　もちつきうさぎ	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	2.9×4.0×9.0
9	10000022	土人形　柴又猿（茶）	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	4.8×5.1×7.6
10	10000023	土人形　柴又猿（白）	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	4.9×6.7×7.0
11	10000024	土人形　おかめ	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	6.3×8.7×7.6
12	10000025	土人形　月待兎	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	3.4×4.9×8.3
13	10000026	土人形　月待兎	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	3.3×4.9×8.3
14	10000027	土人形　月待兎	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	3.3×4.9×8.4
15	10000028	土人形　異人さん	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	3.7×3.9×6.6
16	10000029	土人形　異人さん	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	3.7×3.8×6.6
17	10000030	土人形　犬　だるま付	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	4.3×7.2×5.3
18	10000031	土人形　男雛	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	3.9×6.7×5.4
19	10000032	土人形　女雛	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	3.7×6.3×5.8
20	10000033	土人形　房総雛（男）半製品	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	3.5×6.6×6.5
21	10000034	土人形　房総雛（男）半製品	金沢（尾張屋）春吉／作	［大正～昭和初期］	3.4×6.8×6.5
22	10000035	今戸土人形（河童）色紙	馬作／画	［大正～昭和初期］	27.0×24.0
23	10000036	今戸土人形（金沢春吉翁をしのびて）色紙	春峰／画	昭和29年3月29日	27.1×24.2
24	10000037	今戸土人形（尾張屋春吉翁を囲む会寄書）色紙	田畑進太郎／画	昭和17年5月3日	27.1×24.2
25	10000038	今戸土人形　きつね図	作二郎／画	昭和10年5月19日	198.5×41.5
26	10000039	昭和十年五月十九日尾張屋にて会合記念似顔絵図	作二郎／画	昭和10年5月19日	197.4×42.0
27	10000040	今戸土人形　おかめ図	作二郎／画	［昭和10年5月19日］	196.5×41.8

②　金沢花さんへの聞き取り

金沢花さんは尾張屋（金沢）春吉の娘で、戦前、春吉を手伝って今戸人形作りに従事しいた[16]。春吉と花さんは空襲で家屋等が焼失し、また春吉は昭和19年（1944）２月に亡くなられる。その後、土人形作りを再開することはなく、尾張屋の今戸人形作りは途絶えてしまった。

平成に入る頃、花さんは千葉市花見川区で武佑さんご家族と同居しており、平成10年に96歳でお亡くなりになっている。聞き取りは武佑さんの妻、洋子さんが花さんに３回行っていて、それがカセットテープ全３巻に当たる。１回目の聞き取りは平成元年６月11日で、場所は千葉市の自宅、明治34年（1901）３月生まれの花さんは88歳である。洋子さんにより、テープの題名が「平成元年入院前６月11日ナミさん」と付けられている。２回目のテープは同じく「柏木さんのこと」と題名が付けられている。３回目は聞き取りは平成３年、花さん90歳、やはり洋子さんにより「1991年９月29日清和苑にて」とテープに題名が付けられている。

１回目の聞き取りでは、震災前の金沢家での暮らしや春吉の暮らしについて述べられている。庭には蓬莱山や鏡岩を配し、金魚やカナリア、朝顔や菊、さつきを植えた庭だった。そこで実物を見ながら型を起こしていた。震災前は著名人が集まり頻繁に画会を別の場所で開いていた。震災時に春吉は家におらず、大半の絵画は焼けてしまったが、土人形の型だけは残ったという。

２回目の聞き取りには、政五郎（春吉の父。尾張屋６代目。５代、６代と「兼吉」を名乗った）の事や、春吉の姉、イセさんが６代乾山（浦野繁吉）の最初の妻として嫁いだ話、商売関係の話がある。また早逝したフジマという春吉の弟子の事を話している。箱庭道具や盆景、海水人形を輸出したことや、北浦商会や吉徳に卸していたことが語られ、これが海外貿易に進出するきっかけとなったという。

３回目の聞き取りでは、父や祖父の思い出を通じ、茶・書・川柳等に造詣が深かった春吉のルーツが語られている。下岡蓮杖との姻戚関係やナミさん（下岡蓮杖の孫、６代尾形乾山の娘（尾形）乾女）との血縁関係や近くに住んでいたことでの交流の話、６代尾形乾山（浦野繁吉）、バーナード・リーチらとの関係、箱庭の道具類の製造について語っている。花さんのおじいさんが金魚や亀などを飼っていて、そこからいろいろな生き物の原型を取っていたことなども語られているが、その部分を以下に一部引用する。

「父がお茶をやっていたから、蓬莱山の岩積みして、蓬莱山に見立てて、鏡岩を前にやって、そこに池を深く掘って、商売で金魚とか鯉を飼って、型の原型をとるので、鯉とか金魚とか亀とか、そういうものを。それで、おじいさんはお茶をやっていたから、岩を蓬莱山に見立てて、鏡岩、石を置いて、そこへ深く埋めて、寒くなると金魚や鯉がみんなそこへ入るの。それで、原型で本物を見て、大きいおじいちゃんが型を彫るのよ。それから型におこすの。亀でも、ガチョウでも何でも。だから、ずいぶん鳥や何かを飼ったの。それで、原型を見て、そのとおりに原型をこしらえて、それで原型から型をおこすの。」

３．おわりに

今戸焼職人への調査はあと20年、いや10年早く着手できていたらと悔やまれる。筆者が江戸東京博物館のいわゆる準備室に就職したのは平成元年であるが、まだ今戸焼職人は葛飾区を中心に実際に数人の方が製造していたが、本原稿を書いている平成24年末には廃業された方がほとんどで、お亡くなりになった関係者も大勢いらっしゃる。言い訳になるが、江戸東京博物館を開館させるための業務は多忙を極め、なかなか今戸焼職人の方々や関係者への調査にじっくりと対応することができなかった。反省点であり、また様々な関係者に私の怠慢をあやまりたい。

江戸遺跡からは多くの土器や瓦等が出土している。これらは江戸在地系土器として私達考古学者は捉えている[17]。こうした出土資料には生産地名が刻印されてはおらず、どこで焼かれたものかは想像するしかない。土器という性質上、都市江戸の中、あるいは江戸近郊で焼かれたと考えられるのである。これは考古資料特質から導き出された考古学という学問上の名称であるが、歴史的には都市江戸には今戸焼という土器を中心とした焼物があった。この今戸焼とは歴史的な用語であり、今戸焼＝江戸在地系土器とは言えないのである。ただ江戸在地系土器には、今戸焼は含まれていると考えられる。

一方、近代～現代の今戸焼職人が制作した資料は、今戸の地に在住していなくとも今戸職人の系譜を引き、今戸焼職人という認識の中で制作を行っていた職人のものは今戸焼と言い得ると私は考えている。近世から近代まで大きな断絶がなく続く日本社会においては、近代～現代の今戸職人の調査成果は、江戸期の今戸焼を理解するのに有効に利用できると考えられる。

ただここでは博物館資料としての資料批判と、その属性を理解した上での資料操作が必要となる。例えば参考資料１は永田コレクションと呼ばれている、灯火具のコレクターが収集した資料である。実は筆者は本資料は、幕末から明治にかけての時期、今戸焼でも作られていた「蚊取線香燃焼容器」（仮称）であろうと想定している。以下、参考資料１の概要を説明する。

身部分と蓋に分かれ、蓋をした状態では高さ34.0㎝を測る。身部分は高さ28.6㎝、最大径を底部上約１㎝の所に持ち17.6㎝、底径17.0㎝、最小径は胴下部（高さ9.0㎝）に持ち8.1㎝、口縁部径は外径8.9㎝、内径7.1㎝を測る。胴部には径約２㎝程の穿孔が焼成前に外側から14ヵ所穿たれている。穴は縦に４つ並ぶ列と３つ並ぶ列が交互に90度の間隔を持ち存在する。４つ並びの列は、穴の端部から次の穴の端部まで約4.2㎝を測り、口唇部下５㎝から底部上約４㎝までの間にそれぞれ等間隔に穴が並んでいる。３つ並びの穴では上と下の位置は同じであるが、穴との間隔は6.7㎝程を測る。全体にろくろ成形であり、表面は全て黒色を呈し、底部上の丸く膨らむ部分の上までは縮れた文様のようになり、その上を横方向にきれいに撫でで一部縮れた文様を磨り消しているが、全体に光沢を持つ。底部上部のふくらみを持つ部分も横方向にきれいに撫でられ光沢を有するが、縮れ文様はない。底面はまだらに褐色と黒色部分が認められ、底部外円部は横方向に同心円状に撫でられ、その内側は上げ底になり、中心部で約0.8㎝程上がっている。

蓋部分はろくろ成形で、上部に径2.6㎝程の厚みを有する。身の内側に密着するように突起部を有するが、先端が欠損している。裏面には針金を吊るす為か、高さ２㎝程の舌状突起を有し、その根元に

は径0.2㎝程の小穴が穿たれている。表面は身と同様に縮れ文様を持ち黒色で光沢を有する部分と、蓋の中ほどに沈線が描かれ、その上部分は光沢を有する黒色であるが、縮れ文様は認められない。現状の高さは約6.0㎝を測るが推定高さは７㎝程と考えられる。最大径は蓋底部やや上部分で10.0㎝を測り、身部分に蓋を被せると約0.4㎝程蓋が外にはみ出す。

身、蓋とも胎土は精選され、細かな砂粒を少量含む。破損した剥離面を観察すると褐色の土器質であり、おそらく土器窯または達磨窯で還元炎焼成し、黒色に仕上げたものと想定される。

本資料は例えば参考図版の１や２にあるように絵画資料に今戸焼を表すものとして描かれているものと同じものであろうと考えている。つまり今戸焼の可能性も高いと言えよう。ただここで重要なのが博物館資料としての資料批判である。どこのコレクターがいつどこで収集したものか、その背景に対する調査と確認が必要である。その上で材質や技法などの観察と様々な他資料との比較も必要で、物質資料であれば実測図を作成することが望ましい。ただ今回は残念ながらこうした資料批判を十分行う余裕はないが、この参考資料は秩父在住のコレクターの収集品であり、江戸近郊で製造された可能性はあり、また当該資料の性格上、新しい時代に、古い物を模倣として製造された可能性は低い。こうした資料と時代的には断絶があっても近代～現代の今戸焼職人への調査と、その技術や製造方法、資料の材質等様々な属性を記録し、比較検討する事により、今戸焼の実像をより確かなものにしていくことが出来よう。

またこのような博物館資料の資料批判を考えるとき、今回寄贈された今戸人形の重要性を補完する意味で、花さんへの聞き取りは同時代の職人という、あまり記録が残りにくい人々からの聞き取りであり、貴重な資料といえよう。もちろん聞き取りもそれ自体の信憑性や、当然様々なレベルでの資料批判が必要である。

今回、この資料紹介の本稿が今後、今戸焼や今戸人形等の研究者に少しでも役立てられれば幸いである。最後に、金沢武佑さん、洋子さんを始め、最初に武佑さんを紹介していただいた浦野慶吉さん、そして貴重な今戸人形を保管して江戸東京博物館に寄贈していただいた金沢花さん、他にもご協力いただいた多くの方々にこの場を借りて謝意を表し、鬼籍に入られた方々のご冥福をお祈りしたい。

【註】

1）今戸焼には瓦・煮炊等生活に関わる土器、土人形、工芸品類の４種類がある。
小林克2014「今戸焼」『江戸遺跡研究第１号』に詳しい。

2）江戸東京博物館では、都市歴史研究室が館職員の調査･研究をサポートしており、筆者の研究テーマとして1996年・97年に今戸焼を取り上げた。東京都江戸東京博物館　1997『江戸東京博物館要覧1997』　p28

3）東京都江戸東京博物館　1997『江戸東京博物館調査報告書第4集　館蔵資料報告１ 今戸焼』

4）元々今戸焼を江戸東京博物館の映像候補に推薦したのは、筆者が江戸東京博物館に就職する以前からの江戸遺跡に関する発掘調査と、江戸在地系土器研究会の中で出てきた問題意識からであった。今戸焼の職人が昭和40年代には葛飾区内に結構いたものが、ほとんど廃業していることが明らかとなり、残った職人への調査は緊急を要すると認識していた。

5）東京都江戸東京博物館　2014『江戸東京博物館　江戸東京たてもの園　20年のあゆみ』 P55「江戸東京博物館特集展示」
ここでは、特集展示の第一回として、平成12年度「江戸東京の焼物・今戸焼」、平成14年度「今戸焼」として取り上げられた。

6）　経緯は下記に詳しいが、白井半七の関東大震災後の関西地域での活動については、江戸東京博物館ニュースの記事を読んだ関西の研究者から連絡があり、その結果、様々な情報を得ることができた。
小林克2002「墨田川と今戸焼」『江戸東京博物館調査報告書第13集　隅田川をめぐるくらしと文化』

7）田中野狐箪1942「今戸人形を語る」『鯛車』54（昭和17年６月号）日本郷土玩具協会
山崎萩風1933「今戸焼」『郷土風景５月号』
これらの文献に尾張屋春吉へのレポートや現状報告が掲載されている。

8）この時点で金沢武佑氏名での寄贈書をいただくが、その後資料を整理し、それを東京都の主催する収集委員会、収蔵委員会に付議し、収集が妥当であると判断された後で、正式の資料の受領となる。そのため、あくまでもこの時点では資料の借り受けという。

9）金沢武佑さんには「今戸焼」刊行後、半年ほどしてお渡しした。その後、しばらくしてお名前に誤植があったことが判明し、直接あやまりお許しをいただいた。

10）洋子さんが江戸東京博物館に見学にいらっしゃったおり、担当係に連絡があり、担当学芸員と私とで洋子さんのお話を伺った。私はこの時、洋子さんとお会いするのは最初であったが、武佑さん所蔵の今戸人形との事で呼ばれた。

11）この際、カセットテープと参考資料を何点かお借りした。例えば以下の図録である。
尾形乾女1979『卒寿記念　尾形乾女作品展』（展示図録）会場日本橋三越本店六階工芸サロン
尾形乾女は花さんとは従姉妹と言われており、ナミさんと言った。

12）なお、大変残念なことに平成24年11月に武佑さんは他界された。

13）資料整理は江戸東京博物館が実施しており、筆者は平成21年当時、江戸東京博物館には所属しておらず、資料整理には関わっていない。

14）江戸遺跡からは何カ所かの遺跡（地点）から同様の犬形土人形が出土している。例えば以下の文献があげられる。
東京大学埋蔵文化財調査室　2006『東京大学本郷構内の遺跡　工学部14号館地点』 p 225

15）註３）文献　P91 ～ 92 ～参照

16）小林謙一2010「江戸在地系土器研究の現状と課題」『都市江戸のやきもの』江戸遺跡研究会第23回大会発表要旨
江戸遺跡研究会

１　春駒

２　秋田犬①

２　秋田犬②

２　秋田犬③

３　犬

４　柳森狸（大）半製品①

５　丸〆猫①

５　丸〆猫②

４　柳森狸（大）半製品②

５　丸〆猫③

【図１】今戸土人形Ａ　※番号は、表１に対応。

６　山王猿①

６　山王猿②

６　山王猿③

７　うま

９　柴又猿（茶）①

９　柴又猿（茶）②

10　柴又猿（白）

11　おかめ①

11　おかめ②

11　おかめ③

【図２】今戸土人形Ｂ　※番号は、表１に対応。

12　月待兎

17　犬　だるま付

18　男雛①

19　女雛

18　男雛②

20　房総雛（男）半製品①

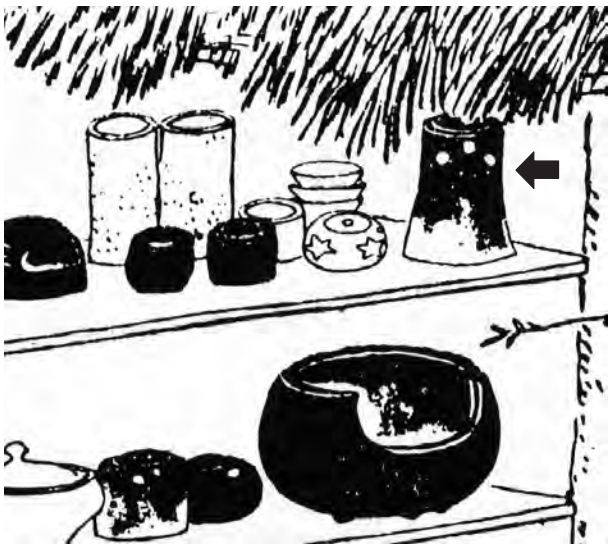
20　房総雛（男）半製品②

【図３】今戸土人形Ｃ　※番号は、表１に対応。

参考資料１　蚊取線香燃焼容器①
江戸東京博物館所蔵資料
永田コレクション 89208983

参考図版１　明治期の絵画「二十四考見立合」に描かれた蚊取線香燃焼容器（江戸東京博物館 1995『あかりの今昔ー光と人の江戸東京史ー』（図録）ｐ 73 より）

参考資料１　蚊取線香燃焼容器②
同上



参考図版２　江戸名所図会「今戸焼」（部分）

【図４】参考資料